

伊勢物語の文体的考察——土佐日記との関係

山 田 清 市

一

伊勢物語の作者を想定する場合、種々の点から帰納される作者の条件に、最も適合してくるのは紀貫之であることを、既往の考証を通して論じてきたのである。⁽¹⁾したがってその条件に適合する要素の一つとして、貫之の『土佐日記』中における特質語句や語法上の特徴が、伊勢物語と共通する点が多いことを指摘しておいたのである。例えば（伊勢物語：武田本・土佐日記：青谿書屋本・以下同じ）、

京のうれしきあまりに、うたもあまりぞおほかる

（土佐日記・二月十六日条）

すみよしのこほり、すみよしのさと、すみよしのはまをゆくに

（伊勢物語・六十八段）

というような重複形式に見る両者の数多い類似を始めとして、或いは

なぎさの院といふところ

（土佐日記・二月九日条）

やつはしといふ所

（伊勢物語・九段）

やぎのやすのりといふひと

(土佐日記・十二月二十三日条)

きのありつねといふ人

(伊勢物語・十六段)

等に指摘される「といふ」形式にみる両者それぞれ二十例以上にのぼる表意形式の一致、或いは漢詩に対して日本の和歌を意識的に表示する「やまとうた」という語例は、伊勢物語の成立前後に位置づけられている竹取物語・大和物語・平中物語には一切所見がないにかかわらず、伊勢・土佐の両者には使用されていること、更には身分上の区分を表わす「かみなかしも」いう語例は、同じく竹取・平中では皆無であり、大和には「なか」の部分省略した「かみしも」の一例を見るに過ぎないが、伊勢・土佐の両者には一致してその完全な用例を見ることが、転じて語法上の面でも謙讓下二段「給ふ」が伊勢・土佐の両者には皆無であること、尊敬の助動詞において、土佐は「る」「らる」、伊勢は「す」「る」「らる」だけであること、「さす」「しむ」は伊勢・土佐ともに使役の用例に限られるが、竹取・大和・平中等には尊敬「さす」の使用例をあげ得ること、その他、自発の助動詞「らる」、断定の「たり」、希望の「たし」「まほし」が伊勢・土佐両者には一致して使用例を見ないこと、かえて大和・平中等には存在しない推量意志の助動詞「むず」が、伊勢・土佐両者にそれぞれ二例ずつ使用されていること等、それらは両者の文体的共通性として見出される客観的事例であり、そのことは両者の文の構成者の同一性につながるものであることを考証したのである。今回は更に如上のごとき点について、以下の事例によって補足的考察を行いたいと思う。

二

先ず第一に「指」という語例であるが、通常の名称である「ゆび」とは記されず伊勢・土佐の両者ともに「および」

という俗語表記をとっている。すなわち

およびのちしてかきつけゝる

(伊勢・二十四段)

みそかとかぞぶればおよびもそこなはれぬべし

(土佐・正月二十日)

とそれぞれ一例ずつ使用例を見るが、この「および」の語例を、万葉・古今・後撰の歌集をはじめ、竹取・大和・平中・落窪・浜松中納言等の諸作品に求めても一例も見出すことはできない。時代が相当下の枕草子や源氏物語のような大部の作品になるとそれぞれ二例ずつ見出される程度である。ところが、貫之集に、

※みちゆく人きのもとにゐてほとゝぎすのなきてゆくをおよびさしていふことあるべし

(西本願寺本)

※おとこをんなの木の本にむれ居たる所に舟にのりてわたる人あるがをよびをさして物いへるやうなりそのさま郭公をきけるにゝたり

と詞書部分に二例も見出されるのであって、伊勢成立期に近接する歌集や竹取・大和・平中等には皆無でそれが土佐日記を含めて、貫之の用語例に三例も見出されることは注目に値することである。

次は「官人」の語例である。伊勢物語に使用されている五十例ばかりの漢語において、それは、

あるくにしぞうの官人のためにて

(伊勢六十段)

と使用されているが、この「官人」の語例は万葉・古今・後撰の歌集をはじめ、竹取・大和・平中・落窪・浜松・枕・源氏等の諸作品にも一例も検索できず、ほとんど唯一の語例とみなされるが、それがやはり貫之集の中に

かねすけの兵衛佐かまがほのほとりにて左衛門の官人みはるのありすけかひゆくむまのはなむけによめる

君おしむ涙おちそふこの河の

みぎはまさりてながるべら也

という用例を指摘できるのである。更にまた右歌の詞書中に見える傍線部の「ほとり」の語例であるが、伊勢物語中には

そのきはのほとりの木のかげに

(九段)

その河のほとりにむれゐて

(九)

かもがはのほとりに

(八十一)

あまのがはのほとりに

(八十二)

海のほとりにあそびありきて

(八十七)

たつたがはのほとりにて

(百六)

と六例あげ得るが、この「ほとり」の語例は竹取・平中では皆無であり、大和に僅か一例を見るにすぎない。それが大和より少量の伊勢に六例も存在することは、伊勢物語の作者が好んで使用した用語の一つに考えられるが、それが土佐日記には

しほうみのほとりにて

(十二月二十二日)

うみのほとりにとまれるひとも

(一月九日)

みまきといふほとりにとまる

(二月八日)

相応寺のほとりに

(二月十一日)

このてらのきしほとりに

(二月十一日)

ほとりにまつもありき

(二月十六日)

と伊勢物語と同じく六例も見出されるのであって、このことは伊勢・土佐両者の文体的特質の共通性をきわだたせるものといえるであろう。

次に訓読表現語としてあげられる「おもへらず」であるが、普通「おもひたらず」とか「おもはず」と表わされる語が、

はたあはじともおもへらず

(伊勢六十九段)

という形で記されている。四段已然形「おもへ」に完了未然形「ら」、それに打消終止形「ず」のついたこの語例は、万葉・古今・後撰はもとより、竹取・大和・平中・落窪・浜松・枕・源氏の諸作品に至るまで一例も見出すことはできない。しかるに『土佐日記』に

ふなうたうたひてなにもおもへらず

(一月九日)

と記されているのである。まことに伊勢・土佐の両者のみに見出される特異表意語の一致であり、両者の関係の深さを知らされるのである。尙、訓読表現語としてあげられる以下の伊勢物語の用例は、同じくまた土佐日記中にも見出されるのである。

いささかなることにつけて

(伊勢・二十一一段)

いさゝかにものかきつく

(土佐・十二月二十一日)

身をしらずして

(伊勢・六十五段)

くるしぎにたへずして

(土佐・二月一日)

ある人のいはく

(伊勢・九段)

かぢとりのいはく

(土佐・二月五日)

「しほがまといふ所にたる

(伊勢・八十一段)

ところにてたるうたよめり

(土佐・二月九日)

右のような例は、必ずしも伊勢・土佐両者のみに限られるのではないが、両者の文体的特質を比較していく上において、やはりあげざるを得ない共通性である。

三

さて次の特質は「まかる」の用法である。通常、この語は貴所から退出する場合や、都から地方に下る場合に使用され、地方から都に上る場合は「まうでく」「まうのぼりて」が使われる。ところが、伊勢物語によると、都へ上るに京へなむまかるとして

(伊勢・十四段)

という使用例が見出されるのである。上京を表わすに「まかる」の使用例は、竹取・大和・平中等では見出し得ないところである。しかるに後撰集貫之歌の詞書において(為相筆本以下同じ)

※やむごとなき事によりてとをき所にまかりてたぐむ月許になんまかりかへるべきといひてまかりくだりてみちよりつかはしける

月かへて君をば見むといひしかど

日だにへだてずこひしきものを

(卷十一)

※兼輔朝臣なくなりてのち、土佐のくによりまかりのぼりてかのあはたの家にて

ひきうへしふたばの松は有ながら

君がちとせのなきぞ悲き

(卷二十)

という二例の使用を見出すのである。後撰集貫之歌本文は、貫之自撰本歌集に近いとみなされており、子息時文が撰者である点からも信憑性が高いと思われるが、しかし後撰集自体にも右以外の他の歌に同様の用例が見出されるので、貫之独自の表意法とはこの限りでは言えないようである。ところが、貫之自身が代表撰者であった古今集について、都へ上ることを表わしている場合の用語例のすべてについて見るに(六条家本以下同じ)

(1)あひしりける人のこしのくにまかりて京にまうてきて又かへりける時によめる

(三八二)

(2)此歌はむかしなまろもろこしにもならはしにつかはしたりけるにあまたのとしをへてえかへりまうてこさりけるを(略)

(四〇六左注)

(3)此歌は或人云をとこをんなもるともに人のくにへまかりけりをとこまかりいたりてすなわちみまかりにければをんなひとり京へかへりけるみちに(略)

(四一二左注)

(4)あつまのかたより京へまうてくとてみちにてよめる

(四一三)

(5)かひの国にあひしりて侍ける人とふらはんとてまかりけるをみちなかにてにはかにやまひをしていまいとなりにければよみて京にもてまかりて母にみせよといひて人につけくる歌

(八六二)

(6)かひのかみに侍りける時に京へまかりのほりける人につかはしける

(九三七)

(7)ふかくさのさとにすみ侍りて京へまうてくとてそかなりける人によみておくりける

(九七一)

(8)つくしに侍りける時にまかりかよひてこうち侍りける人のもとに京にかへりまうてきてつかはしける (九九一)
という八例をあげ得るが、その中(1)(2)(3)(4)(7)(8)の六例は通常の表わし方で問題ないが、(5)(6)の場合は作者自身の上京を
表わすのに使われていなくて、二例とも作者以外の人の場合に使われ、両者ともへり下って丁重な表わし方をとつ
ていることが認められる。ところが前記の後撰集貫之歌の詞書に見る用例は貫之自身の上京を表わすことに使用され
ていて、古今集に見る用語例より推せば、貫之の特異な用語法とみなさざるを得ないようである。ところで伊勢物語
の前記の用例を含む章段は

むかしおとこ、みちのくにユすぶるにゆきいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、せちに
おもへる心なむありける。さてかの女

なか／＼にこひにしなすはくはこにぞ

なるべかりけるたまのをばかり

うたさへぞひなびたりける。さすがにあはれとおおもひけむ。いきてねにけり。夜ふかくいでにければ、女

夜もあけばきつにはめなでくたかけの

まだきになきてせなをやりつる

といへるに、おとこ京へなむまかるとて

くりはらのあねはの松の人ならば

宮このつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、おもひけらしとぞいひをりける

という構成を持ち、陸奥国へ下った男に、その土地の素朴な女が一途に打ち込み、男もその情にほだされて心ならずも逢ってみるが、男は女の田舎びた挙措にやりきれず、早朝逃げだしたが、それすら女は鶏のせいだと勸ちがいで、男の真意をとりちがえて喜んでゐる有様であり、他章段にみるごとき高貴な世界の女性とは相反する境遇に身を置いている女であり、男によってその無教養さがあわれまれているにかかわらず、憐憫を愛情ととりちがえている女への不憫さが男、すなわち作者の目として背後に感じられるのである。それなのにその男の上京について、女に対する謙讓の「まかる」をこの場合、使っていることは、見てきたごとき、この章段の性格から推して、なんとしても不調和の感じをまぬがれ得ないのである。そのことはこの章段の構成者が自らの上京を叙するに「まうでく」よりも「まかる」を使用しがちな習性が自ら働いた結果でないかと推測される。とするならば、みてきたごとく古今集にも見出し得ない用例を、後撰集貫之歌の詞書にみることに於いて、両者のつながりをここにも見出し得るようである。

そういう用語法の共通的性格において、更に次のごとき場合も指摘されるのである。伊勢物語二十一一段は夫婦仲の親密であった男女が、ちょっとしたことこで女は歌をのこして去って行き、男は物思いに沈んで

人はいさおもひやすらむたまかづら

おもかげにのみいとお見えつゝ

と詠むのであるが、この場合、傍線部分の「玉鬘」は「懸け」「影」などの枕詞に使われる用語であるが、この歌は指摘されている通り万葉集卷二、天智天皇崩御の時に倭姫皇后が詠まれた

人はよし思ひ止むとも玉かづら

影に見えつゝ忘らえぬかも

の類歌であり、したがってその改作歌であることが考えられるのである。よって伊勢物語が万葉集の「影」の語を「面影」と改変して、相手の面影を浮びあがらせる微妙な効用を結果的に獲得しているわけである。さて万葉・古今・後撰・拾遺集等において「玉鬘」が「面影」の枕詞として、一首の中に使用されている用例は、前記の万葉一首以外にあげることができない。また物語作品の、竹取・大和・平中・落窪・浜松等や枕草子においても「玉鬘」のみならず「玉葛」の方の用例も皆無である。

ただ万葉集に「面影」の方でなく、「懸け」にかかる方の用例として卷十二に

玉かづら懸けぬ時なく恋ふれども

何しか妹に逢ふ時も無き

(二九九四)

と見えるのみであり、他は「絶ゆ」「繰る」「延ふ」「実ならず」等の枕詞である「玉葛」の方の用例のみである。古今集に見出される二例もまた「玉葛」の方の用例であり、後撰集には一首、「懸け」の方の用例として

ゆきかへるやそうぢびとのたまかつら

かけてぞたのむあふひてふなを

(一一六一)

と見えるのみで、他は全部、「絶ゆ」や「繰る」にかかる「玉葛」の方の用例のみである。

中古関係の私家集でも、斎宮女御集に一首

たまかつらかけはなれたるほどにても

こゝるかよひはたゆなとぞおもふ

と「懸け」の用例で見出されるが、伊勢集や能宣集に見える用例はいずれも「玉葛」の方の用例として使われている

にすぎない。しかるに貫之歌の中には、後撰集卷七に

玉かづら葛木山のもみぢば

おもかげにのみゝえわたる哉

(三九二)

と見えるのをはじめとして、貫之集にも

かけて思ふ人もなけれど夕されば

面かげたえぬ玉かづらかな

(五三七)

たまかづらかげだにしばしたえはこそ

こひつゝもなをよそにならばめ

(六七五)

うちみえん面影ごと玉かづら

ながきかたみに思ふとぞ思ふ

(七三七)

と計四例の「たまかづら」の用語例をあげ得るのである。しかるにその四例のことごとくが「玉葛」の方の用例でなく、「玉鬘」の方に使われている例であり、しかもその用法が「懸け」の方でなく、すべて「面影」との関係に使われていることは殊に重要である。

何故ならば、周辺物語作品や歌集等にわたって、枕詞「玉鬘」は「懸け」の方にかかる用法にのみ見出されるのであって、それが「面影」との結びつきの用法で見出されるのは、中古時代の文献では、実に伊勢物語と貫之歌のみに存在することを知り得るからである。故に前記の伊勢物語歌が万葉の倭姫歌の改作であるならば、万葉本文の「玉かづら影に見えつゝ」を伊勢の「玉かづらおもかげにのみいと見えつゝ」と改変せしめたのは、他に用例がない点に

において、貫之が最も有力な候補としてあげられてくるであろう。尙伊勢物語には「たまかづら」の語例が他に二箇所存在する。しかしそれは他作品に見出される「玉葛」の方の用例であって、しかも

伊勢物語	典故作品
たにせばみゝねまではへるたまかづら たえむと人にわがおもはなくに (三十六段)	谷狭み峯にはひたる玉葛 絶えむの心わが思はなくに 万葉集卷十四
たまかづらはふ木あまたになりぬれば たえぬ心のうれしげもなし (百十八段)	たまかづらはふきあまたになりぬれば たえぬこころのうれしげもなし 古今集卷十四

とみるごとく、万葉に近似し、古今に一致を示して原形に近い形で採録されていることがわかる。すなわち、ほとんど改作の手が加えられていないのであって、したがってこの二例は前記の考察の対象とならず、如上の考察に抵触を来たすことはないのである。

四

次に目を転じて語法上における伊勢・土佐両者の特質を検討しよう。尙以下の検討に対して、対象作品の歌句中に存在する用例は、必ずしもその作品の作者自体の使用語とは限らないので、以下一切その対象から除外する。

まず希望の助動詞「まほし」の場合であるが、その用例を他作品に求めてみると、

見まほしうする人とも

かぐや姫を見まほしうて

或はをのがゆかまほしき所

これをみてよくみまほしさに

せうようせまほしかりければ

とどまりなまほしかりけれど

と指摘され、実に落窪物語では十九例、枕草子では三十三例、源氏物語に至っては二百例余に及ぶにかかわらず、伊

勢・土佐の両者に限って、ただの一例すらもその詞章に用例を見出し得ないのである。

更に打消の推量意志を表わす助動詞「まじ」の場合において、

伊 勢 物 語

土 佐 日 記

女のえうまじかりけるを

(六段)

きゝしるまじくおもほえたれども

(二月二十日)

はたえあるまじかりけり

(四二段)

かならずしもあるまじきわざなり

(二月十六日)

えうまじうなりてのよに

(五五段)

と、伊勢・土佐の両者を通じて、連用形、連体形のみが使用されているが、終止形・已然形は一致して見出し得ない

のである。ところが竹取物語においては、同じく連体形六例のほか

人のうらみもあるまじといふ

(終止)

え出をはしますまじと申せば

(終止)

えとむまじければたゞさしあふぎて

(已然)

と終止形二例、已然形一例をあげ得るのである。また大和物語においては、連用形三例連体形四例のほか

いづちもくいくまじ

(二四八段) (止)

人をば忘れたまふまじや

(二七一) (止)

院にてはあふまじければ

(七七段) (已)

いづれにもあふまじけれど

(二四七段) (已)

と終止形二例、已然形二例をあげ得るのである。更に平中物語では連用形一例、連体形二例のほか

なにのしるしもあるまじ

(二段) (止)

えたばかりまじといへる

(二九段) (止)

と二例の終止形用法を見るのである。落窪物語においても連用形九例、連体形十五例以外に

またもえ聞ゆまじと

(巻一) (止)

えのがれ給ふまじ物を

(巻二) (止)

わらはではえあるまじ

(巻二) (止)

し給へりとももの給ふまじ

(巻二) (止)

なさけなくせらるまじ

(巻二) (止)

外へはもていくまじ

(巻三) (止)

おのれはえとらすまじ

(巻四) (止)

おとるまじけれど

(卷一)(巳)

殿の内はなるまじければ

(卷一)(巳)

とみにね入るまじければ

(卷一)(巳)

と終止形七例・已然形三例の使用を見出すのであり、枕草子もまた連用形七・連体形二十例のほか、未然形一・終止形十二・已然形九の用例が数えられるのである。以上の例示作品のいずれにも終止形用法は必ず見出され、已然形の場合も平中を除くすべてのものに使用例をあげ得るのである。しかるに伊勢・土佐の両者に限り、終止形も已然形も一致して一例もあげることができないのであり、両者の文体的契合をそこに強く思わずにおれないのである。

次に受身・可能・自発・尊敬の助動詞の用例について検討しよう。まず受身「る」の場合においては

伊 勢 物 語

土 佐 日 記

人につかはれて

(六十二段)

つかはれむとて

(一月二十一日)

女のいろいろゆるされたる

(六十五段)

よばれていたりて

(十二月二十五日)

女がたゆるされたりければ

(六十五段)

いはれほのめく

(十二月二十七日)

このおとこにほだされて

(六十五段)

そこなはれぬべし

(一月二十日)

とあげられ、伊勢は五例全部連用形、土佐は四例中、三例が連用形で最も多く、他に未然形を一例だけ持つ。すなわち両者には、終止・連体・已然・命令形が存在しないことで共通性を持つ。これを他作品についてみると、

色好みといはるるかぎり五人

(竹取物語)(体)

いはれさはがることありけり

(平中物語)(体)

若き人々に笑はる

(落窪物語) (止)

さいなまるゝ人多からむかし

(") (体)

首にかゝりていだかるれば

(") (已)

ねぶりをのみしてなどもどかる

(枕草子) (止)

人にあなづらるるもの

(") (体)

まづまづと呼ばるれば

(") (已)

と他活用形用法を適宜摘出できるのであって、みるごとく、伊勢・土佐の兩者には存在しない終止・連体・已然形の用法がみられ、特に連体形ほどの作品にも存在するが、伊勢・土佐にはこれまた一例もないのである。

次に可能の助動詞「る」の場合についてみると

①ものもいはれずといふ

(伊勢・六十二段)

②かぎりしられず

(歌) (") (一段)

③わすらるる時しなれば

(歌) (") (四十六段)

④手にはとられぬ月のうちの

(歌) (") (七十三段)

⑤たのまれなく

(歌) (") (八十三段)

⑥ゆけどなほゆきやられぬは

(歌) (土佐・二月五日)

とあげられるが、①番の伊勢の用例以外は⑥番まで全部歌句中における用例で、検討の対象から除外しなければならぬ。ないわけであるが、注目すべきは③番以外は兩者ともに全部未然形用法である点に共通性が認められるのである。

次に尊敬の助動詞「る」「らる」において

伊勢物語

土佐日記

つくられたるに

(七十八段)

おかれぬめり

(一月七日)

家にてせられける日

(九十七段)

かなしがらるることは
とりかけておちられぬ

(一月十一日)

(一月十四日)

と極めて少数の用例しか存在しないが、両者は「る」「らる」ともに連用形をそれぞれ一例ずつ持ち、土佐は更に「る」の連体形を一例多く持つだけである。ところが他作品については、

そうもな思さる

(終止形・竹取物語)

かづけ物などせらる

(終止形・大和物語)

わびらるる人に

(連体形・平中物語)

御覽ぜらるとも

(終止形・落窪物語)

かくは仰せらるゝ

(連体形・ ")

な渡しそと仰せらるれば

(已然形・ ")

便宜あらば告げられよ

(命令形・ ")

とみるごとく、伊勢・土佐の両者には終止形、及び「らる」の連体形・已然形・命令形等の用法が見出されるのである。あつて、この点もまた伊勢・土佐の文体的近似性を伺わせるのである。

更に自発の助動詞「る」においては、

むねにさはがれて

(三十四段)

おもひやらるる

(一月一日)

猶うとまれぬ

(四十三段)

かたはみやらるれ

(二月二十一日)

たのまるゝかな

(五十五段)

たのまるゝかな

(一〇四段)

とあげられる伊勢の四例は全部歌句中のもので、詞章には一例も見出されず、土佐の方も「一月二十一日」の例は舟唄の中のものであり、結局、両者を通して地の文における自発「る」の用例は、土佐の方に一例だけ連体形用法を見るところで、特に自発の「らる」は伊勢・土佐の両者ともに皆無である点で共通しているのである。

ところが他作品についてみると、

思されざりけれど

(未然形・竹取物語)

そらもなく思さる

(終止形・竹取物語)

思ひつゝ泣きいられて

(連用形・大和物語)

心のうちにははれける

(連用形・平中物語)

思ひ出でられて

(連用形・落窪物語)

まじ思ひ出でらる

(終止形・)

さすがに思ひ出でらるゝ

(連体形・)

おもう給へらるれば

(已然形・)

と伊勢・土佐にない用例を適宜抽出することができるのであって、この点においてもやはり伊勢・土佐両者の近似性を伺わせるに足るであろう。

更に尊敬の助動詞「さす」の場合において、伊勢・土佐の両者には一例も尊敬の「さす」「しむ」の使用例をあげることができない。にもかかわらず、他作品においては

みねにてすべきやうをしへさせ給ふ

(竹取物語)

御衣をかづけさせたまへりけり

(大和物語)

御前にきくをうゑさせたまはむと

(平中物語)

いかどはしはてさせ給はん

(落窪物語)

日の入るほどに起きさせ給ひて

(枕草子)

あまたの御方々を過ぎさせたまひて

(源氏物語)

というごとき事例をどの作品にも適宜抽出できるのであって、このことは特に伊勢・土佐両者のみにおける強力な文体的特質の一致として認めざるを得ないのである。

更に使役の「さす」の場合についてみると

伊 勢 物 語

ものごしにゆひつけさす

(四十四段)

女をばまかでさせて

(六十五段)

そこにござせけり

(六十九段)

土 佐 日 記

いさをけわざせさす

(二月四日)

ものもたえずえさせたり

(二月十六日)

まうけさせたまふ

(七十八段) 一

と見るごとく、伊勢・土佐ともに「さす」の使役は一致して連用形と終止形のみが使われていることを知る。ところがこれを他作品についてみると

(未然形)

まうでこばとらへさせんと申

(竹取物語)

末をつけさせむとてかくいひけり

(大和物語)

人をやりてたづねさせむとて

(")

みそかにつけてとらへさせて

(平中物語)

(連体形)

すゑをつけさせるに

(大和物語)

ものいひつけさせる人に

(平中物語)

(已然形)

人をやりつゝもとめさすれど

(大和物語)

一寺もとめさすれど

(大和物語)

(命令形)

車のもと近くになひよさせせよ

(大和物語)

とみるごとく、成立の近接する竹取・大和・平中物語等の作品において、伊勢・土佐の両者に使用例を見ない未然・

連体・已然・命令形等の用例を見るのであって、ここでもまた、伊勢・土佐が尊敬「さす」の場合と同様に強刃な一
致性を持つことが判明するのである。如上のごとく両者のみに見出される文体論上の契合性は、とりもなおさず両者
の構成者の同一性につながるものであり、かくて文体的考察面においても伊勢物語の作者の座標に、紀貫之その人が
最有力候補として登壇してくることを知らされるのである。

(四九・八・二三・了)

注(1) 拙著『伊勢物語の成立と伝本の研究』桜楓社刊、昭四七・四月

筆者は本学教授・国文学